

Summary of Researches of The Section of Chinese Antiquities Institute

「中国文物研究所古文献研究室」の  
「文書墓志組」紹介―

この二十年来文書墓志整理研究の回顧と現状について

鄧 紅

「古文献研究室」は中国唯一の出土文献の整理と研究に従事する専門機関であり、その前身は1974年～1975年前後に設立された「竹簡帛書整理組」と「吐魯番出土文書整理組」である。「古文献研究室」は1978年に正式に設立され、前後に中国国家文物局と中国文化部に属し、1991年から今まで中国文物研究所に属している。「古文献研究室」の沿革と基本状況について、以下の資料が詳しいので、参照されたい。

- 1) 『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』1984年第2期  
「国内敦煌吐魯番学研究機構及其工作狀況簡介」
- 2) 1993年版『中国大百科全書・文物博物館』巻  
「文化部文物局古文献研究室」条和「文化部古文献研究室」条
- 3) 「中国出土文字資料整理研究の近況―国家文物局古文献研究室の活動」

(日本)『東方学』第64号(1982年) 池田 温

20年来、古文献研究室は主に竹簡、帛書、古文書および墓志の整理と研究を行ってきた。竹簡や帛書の研究についてはよく知られているが、ここでは、中国国内・外でも余り知られていない古文書、墓志の整理と研究および文書墓志組について紹介させていただきたい。

古文書方面はまず、吐魯番文書整理と研究方面の成果が大きい。1959年～1975年、新疆ウイグル自治区博物館文物考古隊は、トルファン地方のアスタナ、ハラ等の古代墓地に対して十三回にわたって規模な発掘と整理を行い、500以上の墓を発掘し、その中の205の墓から古文書が掘り出された。これらの古文書を整理するために、1975年、武漢大学歴史系教授で高名な魏晋南北朝史学者唐長儒をリーダーとする「吐魯番出土文書整理組」が発足された。その整理組は、全国の有名な専門家が集まり、出土した古文書の整理と研究につとめていた。古文献研究室の王去非と王素が最初からこれに参加した。

整理組はまず出土文書中の漢文の文書を整理し綴り合った結果、1800件あまりの完全なる文書を得て、また700件の残片と合わせて、『吐魯番出土文書』積文本全十冊と図文対照本全四冊に収めた。この十冊の本は、1981年から1996年まで実に15年の歳月をかけて、文物出版社によって続々と出版された。『吐魯番出土文書』の編纂に当たって、王去非が積文本第一冊の整理と編集を主宰した。王素は積文本の第四から第十冊の審査と校正を担当し、また図文対照本全四冊の編集を主宰した。『吐魯番出土文書』の積文本は1991年第一回中国古籍図書賞の一等賞を獲得し、図文対照本は1997年第三回国家図書賞に入賞した。1996年、王素と李方の合作で『吐魯番出土文書人名地名索引』が文物出版社から出版された。

次は敦煌文書の研究と整理の成果が取り上げられる。設立した当初から、古文献研究室では敦煌文書の研究整理に力を入れた。まず巨費を辞さずいわゆるスタイン文書とペリオ文書のマイクロ・フィルムと、台湾新文豊出版公司出版の『敦煌宝蔵』全140冊を購入した。1983年、古文献研究室は全国の知名学者を招き、「敦煌古文献編集委員会」を発足させた。古文献研究室の鄧文竟が委員会の常設秘書につとめた。さつ

そく第一回敦煌文書整理の専門題目の研究に取り組んで、『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』1984年第3期に鄧文寬著「『敦煌古文献初編』詳目紹介」という文章が発表された。

しかし、いろいろな内部の原因により、敦煌文書の研究は後ほど古文献研究室から分離し、「敦煌文献編集委員会」が設立された。また、『敦煌文献分類録校叢刊』が発行され、鄧文寬はやはり編集委員兼常設秘書をつとめた。1988年『敦煌文献分類録校叢刊』全十二種は江蘇古籍出版社から出版された。

また、墓志の整理と研究の成果が取り上げられる。

伝世墓志の整理と研究は1982年から始まり、知名学者周紹良を招きその研究項目の責任者とした。また北京図書館の碑帖専門家王敏を招聘してその補佐役につとめられ、古文献研究室の李方、劉紹剛も研究班に参加した。後に趙超が加わり、具体的仕事の責任者となった。

研究班はまず周紹良先生の家藏唐拓を基本にして、『唐代墓志匯編』を編集した。『唐代墓志匯編』は唐代の墓志を3607方收入し、その中の1173方は周紹良先生の家藏で、ほかの2434方は各種の金石著作と文物考古雑誌に載せられたものを集めたものであった。この上下二冊の大作は1992年に上海古籍出版社によって上梓された。

新しい出土墓志の整理と研究は1983年から始まった。国家文物局の依託により（国家文物局1983文物字第643号文件）、古文献研究室は全国の文物管理機構、博物館、考古及び古籍整理機関と合作して、『新中国出土墓志』の編集に着手した。この項目は大型叢書で、当初の計画では各省（市、自治区）一冊、計30冊の出版を予定していた。古文献研究室の趙超はこの項目の責任者になり、任昉は叢書の編集に携わった。しかし、あれから幾つかの予想外のことが発生して、この大プロジェクトは一旦停滞してしまった。1992年、王素は古

文献研究室からの依頼を受けて、『新中国出土墓志』の新しい最高責任者になった。任昉と新人の王昕の協力も得て、1994年『新中国出土墓志』河南卷上下二冊は文物出版社によって出版された。現在、叢書のほかの各巻の編集は順調に進んでおり、近頃に陸統と世を問うことになろう。

古文献研究室の文書墓志組は現在五人の専任研究人員を擁して、それぞれの研究業績は以下のものである。

1) 王素。研究員、国家級傑出貢献を有する中青年専門家。著書には『三省制略論』（1986年）、『唐写本論語鄭氏注及其研究』（1991年）、『大河滾滾・隋代卷』（1992年）、『漢唐職官制度研究』（合著、1993年）、『吐魯番出土文書人名地名索引』（李方と合著、1996年）、『吐魯番出土高昌文献編年』（1997年）、『魏晉南北朝敦煌文献編年』（李方と合著、1997年）、『高昌史稿・統治編』（1998年）等、あり、ほか論文百余篇。

2) 鄧文寬。研究員。敦煌吐魯番文献（特に天文曆法と『壇經』研究）と唐史研究の専門家。著書には『敦煌天文曆法文献輯校』（1996年）、『敦煌吐魯番学耕耘録』（1996年）、『大梵寺佛音・敦煌莫高窟「壇經」讀本』（1997年）、『敦煌吐魯番出土曆書』（1997年）、『敦煌本禪録校』（合著、1998年）等、五冊の専門著書と論文集があり、ほか論文70余篇。

3) 李方。副研究員。敦煌吐魯番文献及唐史、唐代墓志方面の研究の専門家。著書には、『敦煌「論語」集解校証』、『吐魯番出土文書人名地名索引』（王素と合著、1996年）、『魏晉南北朝敦煌文献編年』（王素と合著、1997年）、等あり、ほか論文40余篇。

4) 任昉。副研究員。明清史及び明清墓志研究の専門家。主論文に『明代的郷紳』（1993年）、『明末的党争与「三案」』（1994年）、

「河南出土明回回買鳳墓志銘考釈」(1997年)、「陝西新出明温純墓志考釈」(1998年)等あり、ほか論文30余篇。

5) 王昕。助理研究員。魏晋南北朝隋唐石刻方面の専門家。主論文に、「『新中国出土墓志』河南[卷]評介」(任昉と合著) 1995年)、「關於北齊『義慈惠』石柱的定名」(1997年)、「元熹墓志証偽」(1998年)等があり、ほか論文十余篇。

以上に取り上げた各著書、論文の中で、国内外の学术界によく知られているものが少なくない。しかも、古文献研究室文書墓志組の研究者たちは少数精鋭で、強い基礎的な技能を有するものばかりで、研究能力は群を抜いている。いま拝金主義が横行している中国では、非常に貴重な存在と言うことができよう。二十一世紀に向かって彼らはさらなるすばらしい成果を収められると確信している。

(注：以上のデータと研究人員の構成は1999年年末までのもの、筆者記)